

『空想から科学へ』の大筋をつかむために

不破 哲三

以下は、次回の予習のための参考資料としてつくったものです。

(1) まず、4回全体にわたる準備として、『賃金、価格および利潤』の時にやったように、章ごとに、段落の頭に番号を振ってください。

資料では、第一章について、まずその章の主題は何か、を解説し、その上で、段落の番号順にその段落のテーマを要約しました。

(2) これらの解説を頭に置いた上で、次の講義までに、その日の講義で読む章を、ともかく一通り読んでおいてください。分からないところやひっかかる場所があっても、遠慮なしに通り過ぎて、ともかく章の終わりまで読み通してください。

(3) 講義の日程的な順序は、次の通りです。

第6回 第一章

第7回 第二章

第8回 第三章前半（最初から第23段落・86ページまで）

第9回 第三章後半（第24段落以後、章の終わりまで）

第一章（第6回）

「主題」この章の主題は、科学的社会主義の先行者である空想的社会主義の性格や歴史的な意味をつかむことですが、この主題に取り組むために、エンゲルスは、フランス革命における「啓蒙思想家」たちの役割から説明を始めています。「啓蒙思想家」とは、フランス革命を準備した革命思想家たちのことです。エンゲルスは、なぜここから説き始めたのか、そのことを頭におきながら、この章を読んで行ってください。

「段落ごとの要約」

1、現代の社会主義とフランス革命。（23ページ）

2、革命を準備したのは「啓蒙思想家」たちだった。彼等は「正義と理性の国」の実現を目標とした。（23～25ページ）

3、しかし、実現したのは「ブルジョアジーの国」だった。（25～26ページ）

4、フランス革命と諸階級。空想的社会主義者の源流。（26～27ページ）

5、3人の空想的社会主義者。その思想の共通の特徴——「理性と正義の国」の追求。（27～28ページ）

6、フランス革命における「理性国家」論の挫折のプロセスを見る。（28～31ページ）

7、フランス革命の時代で無産大衆はどういう役割を果たしたか。（31～32ページ）

8、空想的社会主義の潮流が生まれた経済的背景を考える。未成熟な資本主義的生産。（32～3

3ページ)

- 9、現代の社会主義者は、この先輩たちから何を学びとるべきか。(33ページ)
- 10、11、サン・シモンの場合。(33～36ページ)
- 12、フーリエの場合。(36～39ページ)
- 13、17、オウエンの場合。(39～45ページ)
- 18、空想家たちの総括的批判。社会主義は空想から科学になる必要があった。(45～46ページ)